

【小学生の部】日本動物福祉協会一等賞
川口市立本町小学校5年 植田 芽来（うえだ めぐ）

「つらさのかたまり」

私は今年の春、とある牧場へ酪農体験に行きました。私は牛たちが広い土地で青い草を食べ、モーモー鳴いたり、のんびりと過ごしている姿を想像していました。しかし、そこでは厳しい現実を知ることになりました。

職員の方から説明をうけ、防護服を着て長ぐつを消毒して入った牛舎には、たくさんの牛たちがせまい牛舎につながっていました。牛たちは、後ろ足やおしりがけっこようござっていました。ブラシやファンかきの使い方を教えてもらい、牛の毛なみを整えたり、ファンをかたづけたりと牛の世話をしていた時、職員の方が牛の上にぶら下がっている金属のギザギザのバーを指さして、「みなさん、あれはなんだと思いますか？」と質問しました。私は、牛が背中がかゆいときに、バーに背中をこすりつけられるようにしていると思いました。しかし、「みなさんそう思われますが、ちがうんです。実は、このギザギザのバーには電流が流れています、牛が扇をする時にちょうど扇そうじのみぞの位置に落ちるように調整しているのです。」と職員の方が言いました。私はそれを聞いて、おどろくと同時に、ひどいと思いました。電流を流して牛にショックをあたえてまで、人間は自分達の楽を求めているのです。他にも、牛たちは2歳で大人になり、2、3回出産して牛乳を取った後、食肉にされてしまうこと、しほう分の多い濃厚な牛乳を作るために、栄養のあるエサを食べさせ続けられていること、オスが生まれると、食肉用として処分されてしまうことなど悲しい現実を知りました。

私は、そのことを聞いて、ある一頭の牛を思い出しました。牛のメグちゃんです。メグちゃんは、数年前の夏休みの旅行で出会った牛で、乳しぼり体験をさせてくれる牛でした。私と同じ、メグちゃんという名前で親しみがわき、いっしょに写真をとって二年連続会いに行った牛でした。職員の方の話が本当だとすると、あのメグちゃんも、つらい生活を送っていたのでしょうか。その後、ころされてお肉になってしまったのでしょうか。

その後職員さんは、アニマルウェルフェアの話をしてくれました。海外では、手間がかかるでも、牛のために広い牧場で放しがい飼育がすすんでいて、放牧牛の乳は、しほう分が少なく人気がなかったけれど、最近は、意識の高い人がてきて、ネット等で売れるようになってきているそうです。この牧場でも牛を外で放して自由に動ける機会をつくるようにしているそうです。また、観光の乳しぼり体験も牛のストレスを考え、もけいで行うようにしたそうです。

値段が安い牛乳や、濃厚でおいしい牛乳はうれしいけれど、その裏には、たくさんの牛のつらい一生がかくれています。そのことを考えれば、牛乳なんて、牛のつらさのかたまりです。私たち人間は、自分たちさえよければ、同じ地球の仲間がつらくてもいいのでしょうか。牛のつらさに気づいたならば、少し高くてうすい牛乳だって、とびきりおいしい喜びのかたまりになるのではないかでしょうか。